

知的障害特別支援学校における図書に親しむ素地を育む教育実践

—余暇活動の充実とQOLの向上を目指して—

渡部 久美子（教育実践コース）

はじめに

障害者の権利に関する条約（2014）への批准に関連し、「共生社会」の実現は、我が国における最も積極的に取り組むべき重要な課題の一つになった。教育においては「共生社会」の啓発にとどまらず、障害のある人のQOL（生活の質）を高めるための取組の充実も求められている。

障害のある人のQOLは、生活の基本条件と余暇活動、地域活動などが関わっている（Schallock, R.L・岩崎, 2000）。特に余暇活動は、生活をリフレッシュさせたり生活に活力を与えたりする重要な活動である（郷間・藤川・所, 2007）。ただし、他者から「与えられる余暇」ではなく、本人の自己決定の尊重（服部, 2002）や一人でできたり地域で過ごしたりする活動（鈴木・細谷, 2016）が求められているため、知的障害がある人に対する、より一層の支援の充実が必要である。

読書活動は、そうした余暇活動の一つである。

「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（2016）の施行に伴い、公立図書館は合理的配慮を義務付けられた。これにより、知的障害のある人の図書や図書館の利用が増えることが期待されている（障害者サービスに関する調査研究, 2018）。

子どもの読書活動に関して、N市では様々な計画を策定し推進を図ってきた。「第三次N市子ども読書推進計画」（2020）では、知的障害がある子どもを含めた全ての子どもたちが、読書習慣を身に付けることを目指している。

筆者の実習校であるA校は、N市に2校ある知的障害特別支援学校の1校である。2017年に学校司書の配置がなされた。学校図書館の現状に関する調査（2016）に示された学校司書の配置率や教育課程への学校図書館の利用・活用の位置付けから判断すると、A校は読書活動を実施するにあたって、知的障害特別支援学校の中では環境が整っている。

以上から、障害がある人のQOLを向上させる余暇活動として読書活動に焦点をあて、N市のA校において図書に親しむ素地を育んでいく教育実践に関する研究を行う。

1 A校における図書を利用した授業の実態調査と保護者の意識調査

(1) 目的

A校に在籍する子どもの学校や家庭での図書利用を明らかにする。

(2) 方法

① 図書を利用した授業の実態調査

2017年度と2018年度のA校小学部「遊びの指導」16題材、「生活単元学習」10単元、「課題別学習」10題材で図書が利用されていた学習指導案を調査した。

② 図書に関する保護者の意識調査

2019年7月中旬に、A校の保護者163名を対象に、学級担任を通じて「図書利用についてのアンケート」を配布及び回収した。

(3) 結果

① 図書を利用した授業の実態調査

全ての学年で図書が利用されていた。使用されていた図書は絵本で、使用方法は職員による読み聞かせであった。使用場面は、単元の1時間目、主活動に入る前、主活動の始めの場面であった。読み聞かせの際は、大型絵本の提示、絵本をテレビに映して提示、プレゼンテーションソフトを使用して動きをつけた映像をテレビに映して提示するなど様々な媒体が使用されていた。

② 図書に関する保護者の意識調査

163名中135名から回答を得た。このうち75.5%の保護者が、子どもは図書が好きであると捉え、これまでに家庭で読書や読み聞かせを経験していた。また、図書や学校図書館を利用することによって興味の幅が広がることを期待していた。66.9%が学校図書館の図書の貸出を希望していたが、公共図書館利用経験は26.1%であった。

家庭での余暇活動は、「テレビ、DVD、YouTubeを見る」が回答数120であり最も多かった。

2 A校におけるQOLの向上を目指したブックトークの授業実践

(1) 目的

ブックトークと図書マップの利用が、読書行動とQOLの向上にどう影響するか検討する。

(2)方法

小学部2年と3年の学級の各6名の児童と保護者を参加者とした。DQ（発達指数）は、2年6名が18～50、3年6名が10～53、それぞれの範囲内であった。

①QOL調査

2019年10月中旬と2020年1月下旬の2回、A校の学級担任を通じて「小・中学生版QOL尺度親用（The KINDL[®]-questionnaire Parent Version）」を保護者に配布及び回収した。

②図書利用の実態調査

2019年10月中旬と2020年1月下旬の2回、図書マップの「図書利用についての願い」と「図書の利用状況」を、2019年10月下旬から2020年1月下旬の期間に「家庭で見たり読んだりした本」について調査した。2019年7月中旬と2020年1月下旬の2回、図書に関する保護者の意識調査の「図書利用についてのアンケート」を保護者に配布及び回収した。

③図書活用の授業実践

2019年10月下旬から2020年1月下旬までの3か月間に、各学級5回ずつブックトークを取り入れた授業を当該学級3名の職員と学校司書、筆者の5名のチームティーチングで特別活動の時間に学校図書館で実施した。1単位時間30分の学習活動の流れは、「挨拶→図書の返却→ブックトーク→ブックトークで紹介された図書と自分が好きな図書を1冊ずつ選んで借りる→自由に図書を見たり読んだりする→挨拶」であった。ブックトークでは、「1.ブックトークに参加する（参加）」、「2.ブックトークで紹介された図書を選ぶ（選択）」、「3.授業中、ブックトークで紹介された図書を見たり読んだりする（読書）」の3項目を標的行動として参加職員が観察及び記録を行った。標的行動の評価は、4を最高得点とする4段階の評定尺度法を用いた。

借りた図書は家庭に持ち帰り1週間後に返却とした。図書と一緒に図書マップを持ち帰り、保護者に「家庭で見たり読んだりした本の記録」を記入してもらった。

④社会的妥当性

授業実践後、学級担任と学校司書を対象にアンケート調査を実施し、社会的妥当性を検討した。

(3)結果

①QOL調査

「QOL総得点」が上昇した子どもは8名中5名（62.5%）であった。下位領域においては、「学校生活」の得点が増加した子どもは8名中5名

（62.5%）、「自尊感情」の得点が増加した子どもは8名中4名（50.0%）であった。

②図書利用の実態調査

ブックトークで紹介された図書を家庭で読んだ割合が100%の子どもは12名中4名（33.3%）、80%の子どもは3名（25.0%）であった。

授業実践後、学校図書館の貸出希望が9名中4名（44.4%）から8名（88.9%）に上昇した。公共図書館の利用は9名中2名（22.2%）から2名（22.2%）と変わらなかった。

3年のA児が、ブックトークで紹介された図書を家庭で見たり読んだりした割合は100%であった。図書マップに「短い本は自分で読むことに成功」「長い本も頑張って読みました」と記述があった。実践前のアンケートでは、図書は「どちらかというと嫌い」であったが、実践後は「どちらかというと好き」となった。

3年のB児が、ブックトークで紹介された図書を家庭で見たり読んだりした割合は80%であった。図書マップに「とても楽しそうに絵本を見ていました」と記述があった。実践前のアンケートでは、学校図書館から図書を借りて家庭で読むことは「希望しない」であったが、実践後は「希望する」となった。

③図書活用の授業実践

2年の評価項目の平均は、「1.参加」が3.2、「2.選択」が3.4、「3.読書」が2.9であった。3年の評価項目の平均は、同様に「1.参加」が3.6、「2.選択」が3.5、「3.読書」が2.7であった。

④社会的妥当性

参加職員は、子どもも職員も受け入れやすい活動であり、現在の学校体制の中でも無理なく実施できる活動であると捉えた。

3 A校におけるブックトーク動画を活用した授業実践—B校の授業実践との比較—

(1)目的

ブックトーク動画を作成し授業実践を行い、自主的・自発的な読書活動に結びつくかどうかを検討する。A校とB校の学校間の比較も行う。

(2)方法

参加児童生徒は、A校小学部1年8名、3年8名、5年8名、中学部1年8名、2年8名、3年7名の6学級47名、B校小学部高学年複式学級5名と中学部3年6名の2学級11名であった。

参加職員は3名体制のチームティーチングを基本として、当該学級それぞれ2名の学級担任と筆者であった。

①図書や動画に関する実態調査

授業実践前、学級担任を対象に参加児童生徒の図書や動画に関する実態についてアンケート調査を実施した。質問項目は、「1. 本は好きですか(好き)」、「2. 教室で本を見たり読んだりしますか(教室での読書)」、「3. 図書館で本を見たり読んだりしますか(図書館利用)」、「4. 読み聞かせは好きですか(読み聞かせ)」、「5. 映像(テレビ・ビデオなど)を見ることは好きですか(映像)」の5項目であった。評価は、4を最高得点とする4段階の評定尺度法を用いた。

②ブックトーク動画を活用した授業実践

A校は2020年7月中旬、B校は2020年8月下旬に、各学級1回ずつブックトーク動画を活用した授業を特別活動の時間を使って自教室で実施した。1単位時間30分の学習活動の流れは、「挨拶→学習活動を知る→ブックトーク動画を視聴する→ブックトークで紹介された図書や用意された図書の中から自由に見たり読んだりする→挨拶」であった。ブックトークでは、「1. 動画ブックトークに参加する(参加)」、「2. 動画ブックトークで紹介された図書や用意された図書を見たり読んだりする(読書)」の2項目について、参加職員が記録及び評価をした。

③社会的妥当性

授業実践後、学級担任を対象にアンケート調査を実施し、社会的妥当性を検討した。

(3)結果

①図書や動画に関する実態調査

「1. 好き」はA校3.3、B校3.2で両校に差はなかった。「2. 教室での読書」は、A校3.2、B校2.8、「4. 読み聞かせ」は、A校3.5、B校3.0でA校が高く、「5. 映像」はA校3.5、B校4.0でB校が高かった。「3. 図書館利用」はA校のみの評価で3.4であった。

②ブックトーク動画を活用した授業実践

「1. 参加」はA校3.6、B校3.5、「2. 読書」は、A校3.7、B校3.5でいずれも大きな差はなかった。ただし「2. 読書」で実際に見たり読んだりされた上位3冊に違いがあり、A校では「動画ブックトークで紹介された図書」が2冊含まれていたのに対し、B校では0冊であった。

③社会的妥当性

社会的妥当性については、両校とも「子どもも担任も受け入れやすい活動であった」「機会があればやってみよう」と評価していた。A校は「現在の学校体制の中で無理なく行うことができる」とした一方、B校は積極的な評価ではなかった。

4 読書活動支援方策の多角化

(1) A校における職員によるブックトーク動画DVDの制作

A校の子どもにとって身近な大人であるA校図書館教育部職員11名による、14テーマのブックトークを収録した動画DVDを制作した。2020年7月下旬に撮影、8月末に計12枚のDVDが完成した。DVDは各学年に配布し、学級活動の時間や読書旬間で視聴した。

(2) A校における図書委員会によるブックトーク動画DVDの制作

全校に図書の利用を働き掛ける取組として、図書委員会の中学部2年生による「工作」がテーマのブックトークを収録したDVDを制作した。2020年10月下旬に撮影、2021年2月に12枚のDVDが完成した。DVDは各学年に配布し、読書旬間で視聴した。

5 実践前後におけるA校の保護者の意識の比較、A校とC校の学校図書館の状況、D校とE校におけるブックトークの授業実践並びにA校との比較

(1) 実践前後のA校における保護者の意識調査

①方法

「図書利用についてのアンケート」への回答を実践前(2019年7月中旬)後(2020年12月中旬)で比較する。

②結果

Table 1に授業実践前後の図書に関する保護者の意識調査の比較を示した。

家庭での余暇活動は、上位3項目に変化はなかったが、「絵本、図鑑、漫画、新聞、雑誌、チラシなどを見る」が「おもちゃで遊ぶ」を抜いて5位から4位に上昇した。

Table 1 授業実践前後の図書に関する保護者の意識調査

項目	実践前 (%)	実践後 (%)
本の好き嫌い「好き」「どちらかという好き」	75.5	78.0
家庭での読書経験「あり」	88.5	89.7
家庭での読書頻度「ほとんど毎日」「週に数回」	58.5	65.6
本を読む意義「興味の幅が広がる」	20.8	22.8
家庭での読み聞かせ「週に数回」「月に数回」	47.1	55.7
学校図書館での図書の貸出し希望	66.9	73.5
公共図書館の利用経験「あり」	26.1	21.5

(2) A校とC校の学校図書館の状況

①方法

N市にある知的障害特別支援学校のA校とC校の学校図書館の状況を明らかにして、今後の読書環境の整備のための具体的な見通しを持つために、2020年12月下旬、両校の学校司書を対象に「A

校・C校の学校図書館の状況調査」を実施した。

②結果

Table 2 物的整備の状況の比較, Table 3 に読書活動の状況の比較, Table 4 に一人当たりの貸出冊数の比較を示した。

Table 2 A校とC校の物的整備の状況

項目	A校	C校
図書標準冊数	9,288冊	9,704冊
蔵書冊数	4,535冊	4,578冊
図書標準達成率	48.8%	47.2%
学校図書館の施設	専用	兼用

Table 3 A校とC校の読書活動の状況

項目	A校	C校
「学校図書館全体計画」の策定	○	×
「年間活用計画」の作成	○	○
「図書館便り」の発行	○	○
読書旬間の開催	○	○
児童・生徒による図書委員会の実施	○	×
司書や職員による読み聞かせ	○	○
司書や職員によるブックトーク	○	△
ボランティアによる読み聞かせ	×	○
家庭で読むための図書の貸出し	○	○
図書館や図書の利用に関わる校内研修	×	○

※○「実施している」 ×「実施していない」 △「一部実施」

Table 4 A校とC校の一人当たりの貸出冊数

学校名	2018年度	2019年度	2020年度
A校	35.1冊	38.5冊	32.9冊
C校	14.0冊	18.9冊	18.8冊

(3) D校とE校におけるブックトークの授業実践並びにA校との比較

①方法

A校と同じ県内にある知的障害特別支援学校であるD校小学部と重複学級 25名, E校小学部と中学部 25名, 各校の職員を対象に, 図書や動画に関する実態調査, ブックトークの授業実践, 社会的妥当性の検討(それぞれ2の授業実践と同じ)をした。実施期間はD校 2020年7月中旬, E校 2020年7月下旬であった。

②結果

実態調査の結果は, 「1. 好き」はD校 3.6, E校 3.8, 「4. 読み聞かせ」はD校 3.6, E校 3.8であった。A校の「1. 好き」3.3, 「4. 読み聞かせ」3.5と比較しやや高い結果であった。

授業実践の標的行動の評価は, 「1. 参加」はD校 3.3, E校 3.6でありA校(3.4)と同程度であった。「2. 読書」は, D校 3.0, E校 3.2であり, A校(3.7)と比較し低かった。

参加職員は, 「子どもにとっても担任にとっても受け入れやすい活動」「活動の結果に満足している」と評価した一方, 「現在の学校体制で無理なく行うこと」「機会があればやってみたい」に対してはA校と比較して積極的な評価ではなかった。

6 総合考察

1の調査からは「知的障害特別支援学校において在籍する児童生徒の多くが図書に興味をもっており, 図書を利用した授業が工夫されて実施されていること, 各家庭において読書に関する様々な取組がなされていること」, 2の授業実践からは「図書活用の授業実践が児童生徒のQOLを向上させること」, 3の授業実践からは「ブックトーク動画を活用した授業実践が児童生徒の自主的・自発的な読書に結び付くこと, 学校間で児童生徒が選択した図書と取組に対する職員集団の評価(積極的か否か)に違いがあること」が, 4の取組からは「読書活動の充実のために, 動画を活用したり生徒の委員会活動と関連させたりするなど, さらなる多角化が可能であること」, 5の比較からは「物的整備が同程度であっても読書活動状況の違いが子どもの読書量(貸出冊数)に影響すること, どの学校でも児童生徒の読書への興味・関心は高いが学校内での取組に対する職員集団の評価の違いが読書活動を左右すること」が示唆される。

本教育実践から, 知的障害のある子どもが図書に親しむ素地を育むためには, 子どもが生活する場に図書がある環境を整備した上で, 次の2点が重要であると考察した。

(1) 子どもと図書をつなぐ人的環境の充実

学校では学校司書や職員, 図書委員, 家庭では保護者といった子どもにとって身近な人が, 子どもと図書をつなぐ役割を果たす。子どもと図書をつなぐ人が生活の様々な場にいることで, 子どもが図書に親しむ機会が増えるであろう。

(2) 子どもと図書をつなぐ読書活動の工夫

読書経験を踏まえたり, 得意な読書方法を生かしたり子どもの読書活動を工夫することにより, 自主的・自発的な読書が促され学校や家庭での生活が豊かになる。「個別的教育支援計画」と「学校図書館全体計画」の両方を活用した読書活動を工夫していくことで, 子どもと図書を計画的に継続してつないでいくことができるであろう。

7 おわりに

本教育実践は, 読書活動を一例として, 知的障害のある人の現在及び将来の生活の充実の一助となるよう教育活動を展開した。今後は読書活動はもちろん様々な活動において, 学習環境を整備した上で学習活動の工夫・改善を図っていくことや職員集団の意識のベクトルをそろえて学習活動に取り組んでいくことなど学校全体で取り組んでいきたい。